

16世帯が集合 「脱・核家族」

「かんかん森」の住人たちが、食堂に集まってきた



血縁地縁なし 都心で共同生活

血縁もなく地縁もなかった16世帯23人が、東京都心の集合住宅で、家事を分担し、食堂で夕食を共にする共同生活を今夏から始めた。暮らすのは定年退職した会社員、共働きの夫婦、独身女性ら。戦後進んだ小家族化に飽き足らず「脱・核家族」を試みる。

◆キーワード
コレクティブハウジング
集合住宅に共用空間を作り、住人が家事の一

食堂で共に夕食 「隣近所が必要」

集合住宅「かんかん森」は東京都荒川区東日暮里3丁目の区立中学校跡地にある。新築の12階建て複合施設の2、3階部分で、ほかの階には保育園や有料老人ホームも入る。マンションのように各戸に分かれた住居部分のほかに、36畳の広さがある食堂・居間や、洗濯乾燥室、倉庫などの共有スペースがあるのが特徴だ。6月から、これまで28戸中16戸が入居し、10年来、著書やフォーラムで考え方を広めてきた。

「かんかん森」は有料老人ホームの運営などを手がける「生活科学運営」(東京都中央区)が作り、NPO法人「コレクティブハウジング社」(同豊島区)が運営する。モデルは、コレクティブハウジング・キーワードという住まい方だ。NPO理事長の小谷部育子・日本女子大教授らが16年来、著書やフォーラムで考え方を広めてきた。

共同生活の中心は、食堂での夕食とその準備。5班に分かれて1週間ずつ担当し、20人前後の食事を作る。班内でも担当曜日を決めるので、1人が台所に立つのは5週に2日ほどだ。1食500円の予約制。食事は午後7時から、遅くなる時は取り置きもできる。

16戸は単身世帯が10戸が心地よいという。「自分

部をシェアする暮らし。北欧で70年代、働く女性らが、よりよい暮らし方を求めて実現した。スウェーデンでは公営賃貸住宅など50〜60の計画が実施されている。日本では、阪神大震災の高齢者向け公的復興住宅に考案が取り入れられたが、多世代型は珍しい。

かにも高齢や新婚の夫婦、母娘など様々。年齢は3歳から78歳まで幅広い。家賃は7万1千円(25平方メートル)〜17万4千円(63平方メートル)。共有部分の家賃も含まれる。

フリープログラマーの木下孝二さん(27)は、長男(3)、妻(27)の3人家族。夫婦共働き。父親の転勤が続き、地元と呼べる場所もないと、千葉県船橋市から引っ越してきた。「家族3人だけではストレスのはげ口がない。子どもは多くの人とかがかわれる場所で育てたかった」

一人暮らしの自営業平賀はつ子さん(51)は、家族ほど濃密ではない関係が心地よいという。「自分のペースだけでなく、ほかの人とかかわることが生きていくエネルギーになる。50代になり、隣近所のある暮らしが必要になった」

大手企業を4月に定年退職したばかりの男性(60)も転勤族。都内の住宅を出なければならず、夫婦2人の11万所目の住まいにここを選んだ。息子2人は既に独立。仕事絡みの人間関係が無くなると、地域に知り合いもない。賃貸なので気に入らなければ引っ越せると新生活に飛び込んだ。

「一年になれば、酒を飲んで、パチンコをやるぐらいしかやることがない。ここでは暇な分だけほかの人の役に立ってる。会社の同僚には理解できないかもしれないが」

小谷部理事長は「ここでの暮らしが、従来の家族の姿や集合住宅の暮らしを問い直すきっかけになれば」と言う。目指すのは、規模の拡大で家事を合理化し、互いが触れ合うゆとりある暮らしだという。